

福祉の体験をして

大久保小 四年

船曳 ふねびき

紗矢 さや

日常では、自分が見るもの感じるものがある。当たり前になっ、ていて、そうではない人がいることに意識が向きません。でも、学校での福祉体験は、自分の感覚を広げ、他者を理解するための大きなきかけになりました。

目隠しをして白杖を持って歩く体験では、視覚障害の人の不安さが分かった気がします。見えると見えないとでは大違いで、毎日通う

学校も別世界のように思えました。慣れていく学校がこんなに怖いのなら、初めての場所ならどんなに不安だろうと思います。

次に聴覚障害の体験として指文字を学び、家族にやっ、てみました。父は首をかしげていました。相手が指文字を知らない、聴覚障害の人が伝えた、ことが伝わりません。学校で皆が指文字を学ぶ、などして多くの人を知ることが、障害のある人が暮らしやすくなる。一つの方法ではないかと思いました。

三つ目に、車いすの体験では、人の乗った重い車いすを動かす力がいり、周囲への気配りも必要と、想像以上に大変でした。徒歩ならば何気なく超えられる小さな段差も、車いすではむずかしいところもあります。曲がり角やエシベーターの乗り降りも周囲の様子をよく見なければなりません。

私は自分のことしかわかっていなかっただと体験を通して感じました。そして、白杖を持つ人も、声以外のコミュニケーションに頼る

人も、車いすで移動する人も、そうでない人も、みんながもとお互いのことを知り、助け合えたらと思います。体験を通じて、白杖を持つて迷っていた人に母が声をかけ、駅まで案内していたのを思い出しました。私も困っている人がいれば、きんちょうしてしまいうですすが声をかけたいと思います。小さな声かけがみんなのくらしやすさ、生きやすさにつながると思います。少しでも、自分のあたりまえをこえていきたいと思えます。